

# 関西・瀬戸内、 本物の木の家

家づくりの知恵は、地域の中にこそある

●地域に根ざす本物の木の家

## 地域工務店が建てた本物の木の家 26事例

●地域の山と家づくり

京都／紀州／吉野の山を訪ねて

●地域の文化を知る

関西・瀬戸内 民家と町並み探訪／関西左官事情

●地域の温熱環境を学ぶ

夏の暑さをしのぐ住まいと暮らし



# 父の思いと 経験がつまっただ 木の家のぬくもり

事例・A邸 文・長井美暁 写真・垂見孔士

娘の将来を思って家を新築した父。  
電気職人の父はこれまでの経験と知識を  
家づくりに生かしたいと考えた。  
建築に通じている父が選んだパートナーは、  
まっちゃんとした仕事をすると地元で評判の菅組だった。





この家は高知・四万十川流域で育った杉の天然乾燥材を使っている。吹き抜けまわりの梁は高さ30cm。がっしりとしたつくりで、安心感がある。座卓の天板も杉だ。





キッチンはおさまの希望で壁付け型を選んだ。作業台を兼ねる造り付けのダイニングテーブルは、うどんをこねたり、お菓子をつくったりするのに便利だという。薪ストーブは火を点けて2時間くらいで家のなかが暖まる。お嬢さんも薪に火を点けるのは得意とか。

庭に面した南側の開口部から、明るい光がたっぷり降り注ぐ。吹き抜けの居間の伸びやかな開放感、天井高を抑えた茶の間とキッチンの落ち着いた雰囲気。二つの心地よい空気が重なり合う。

施主のAさんは、築百年ほどの主屋に暮らしていたが、隣接する納屋をつぶしてこの家を建てた。「娘に譲ることもできるしね」。古い家に暮らすのは大変だから、というのとは表向きの理由で、実は一人娘の将来を考えての新築らしい。夫婦と20代の娘が住む家としては若々しいと感じたのは、そのためかもしれない。お嬢さんがいつ伴侶を連れてきててもいいように、現在、主屋も改装中である。

Aさんは電気設備の職人で、家のつくりや材料に明るい。自らの家づくりにあたっては、まず天然乾燥の木材を使いたいと考えたという。天然乾燥材は乾燥するにつれ、表面に割れが出てくるが、「木は割れるもの。私はその性質をよく知っている。それより人工乾燥した木は香りが少なくなってしまうから」。木の味わいの一つに香りがあるということだろう。その天然乾燥の杉を求めて、菅組の担当者と四万十川流域の高知県大正町まで足を運んだ。そして自分の家に用いる木を直に触れて確かめた。

基本的な間取りはAさんが考えた。1階は居間と茶の間と水まわりで、キッチンはおさまの希望で壁付けにして、作業台兼ダイニングテーブルを造り付けた。階段を上がってすぐの2階ホールは吹き

抜けに面して、まるで舞台のよう。寝室と子ども部屋にも吹き抜け側にそれぞれ小窓が付いていて、上下の一体感がある。

Aさんは「自分の思った通りにできた」と満足げな表情を浮かべる。「こんな感じで」とイメージを伝えただけで、菅組の設計者、現場監督、大工がその希望を汲んで、細部まできちんと形にしてくれたことも、その満足感を高めている。

### 電気職人の父が奮闘した

本当は、家の壁はほぼすべて漆喰で仕上げたかったが、「家族に真っ白はいかんと言われた」ので、2階は珪藻土にした。Aさんは当初から自然素材を使おうと考えていたが、それは住む人の健康のためだけではない。工事のとき職人に負担がかからず、将来撤去する際も自然環境に影響を及ぼさないようにしたかったからだという。エアコンを付けずに快適に過ごせる家がいいとも思い、野地板と







上・下ノ車の中央に設けられた吹抜けを介して  
視線が一体感をもって暮らすことができる。



右／庭には甘夏や金柑の木が植えてあり、室内から外を見ると、鮮やかな緑が目まぶしく映る。下／古材の梁と碇子という組み合わせが目を引き。階段の踏み板もAさんたっての希望で無垢の杉板を使った。



垂木の間に通気層と棟換気を設けることも提案した。このあたりはさすがが、建築現場に通じている人らしい判断だ。

給排水の配管や電気配線など、設備関係の工事はAさんが自ら手がけた。ダイニングテーブルの上のランプシェードは由布院の雑貨店から取り寄せたものだったり、吹き抜けのぼんぼりのような照明が調光できたり、その照明を吊っている古材はかつては納屋の梁で、それに碇子を取り付けたり、そこここにAさんのセンスが窺える。

建物全体の高さは、主屋と棟の位置を揃えるために少し抑えている。その分、天井を張ると圧迫感があるので、2階の床裏や野地板の現しとした。天井裏がないと配線がむき出しになるため、きれいに作業しなければならず手間だが、Aさんはそれも楽しみながらやったようだ。なにしろ娘が手伝ってくれたのである。お嬢さんは「手伝えと言うから手伝ったのに、ありがとうの一言もないですよ」と言うけれど、めでたく新築になって、以前よりお父さんと仕事の話をするようになったという。

奥さまも、「重そうな木材を一人でかついで、大工さんや職人さんたちはすごいって思いました」と、改めて見る建築現場の風景は新鮮だったと話す。「家を建てるという経験を通して、家族3人が一体になったというか、何かしら心に通じ合うものを感じました」。その思いはきっと、ご主人もお嬢さんも抱いているはずだ。





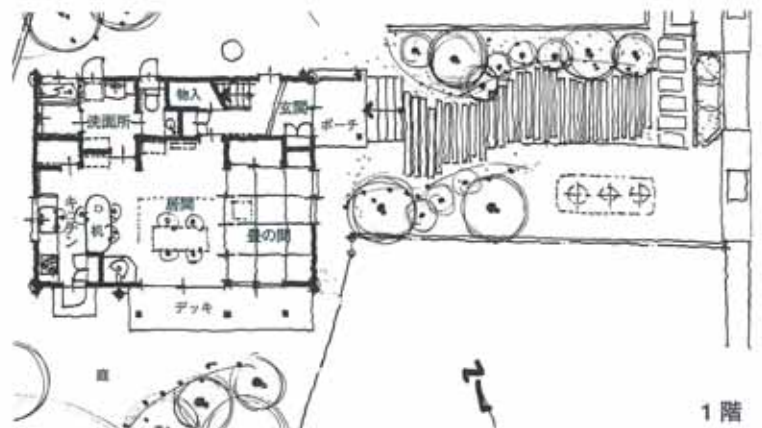
上/お嬢さんの部屋。壁は淡いクリーム色の珪藻土塗り。下/寝室の裏にある書斎。左/プラン上、玄関から階段が見えるようにしたかった、とAさん。



昔ながらの方法で、小舞下地に珪藻土を塗った上に焼杉を張った外壁。



作務衣姿のAさんと奥さま、お嬢さん、管組の担当者たち。



#### 建築DATA

所在地 ● 香川県三豊市  
 家族構成 ● 夫婦+子ども1人  
 敷地面積 ● 366.43 m<sup>2</sup>  
 延床面積 ● 115.58m<sup>2</sup>  
 (1階=61.29 m<sup>2</sup> 2階=54.29m<sup>2</sup>)  
 竣工 ● 2006年6月 (2005年9月~2006年6月)  
 設計施工 ● 榊管組 TEL 0875-82-2441  
 構造形式 ● 木造軸組工法 (土塗小舞壁)  
 主な外部仕上げ ● 屋根: ガルバリウム鋼板 軒天: 杉野地板化粧現し 外壁: 焼杉  
 主な内部仕上げ ● 床: 杉縁甲板、松縁甲板 壁: 漆喰、珪藻土 天井: 杉力板現し



家づくりを通して、地域の山や環境を考える機会を広める



歩きづらい急な斜面を、やっとの思いで登っていく。



家づくりと山は直結している。地域に根ざした家づくりを行う菅組は、家を建てる人にそのことを知ってもらうためのイベントを積極的にを行っている。その一つに同行した。



お清めの塩をまいて、斧を入れて、チェーンソーで伐採。あっという間だった。

普通の人が入る機会がめったにない。だから、家づくりを通して山を身近に感じてもらうきっかけを提供したいと考えた菅組は、大黒柱の伐採ツアーを行っている。この日は、Tさんの家の大黒柱を伐採するという。

平野が広がる香川県は、山林の面積が意外に小さい。山に入っても少し奥に進むと、すぐに徳島や高知の県境を越えてしまう。だからそもそも林業家が少ないのだが、その中でも専業となると県内にただ一人。それが豊田均さんだ。

豊田さんによると、香川は降雨量が少ないので木の生長が遅いが、そのぶん年輪が密だという。豊田さんの山に育つのは、9割が檜、1割が杉。

T家の大黒柱として、豊田さんがあらかじめ選んでおいたのは、90年生の檜だ。「7寸角で、6メートルの通し柱になると聞いていたので、それに見合う姿のいい木を探しました」。Tさん夫婦と3人の子どもたち、菅組専務の菅徹夫さん、同社の若い社員とともに、張り切った山道を進む。

あるところまで行くと、豊田さんが「あそこだから」と指差して、いきなり急な斜面を登り始めた。どうやら目指す木はその中腹に立っているらしい。山歩きに慣れている豊田さんはこともなげに登っていったが、こちらはかなり蛇行しながら登っても、足が滑ったりしてなかなか目的地に近づけない。

ようやくTさん一家が未来の大黒柱と

ご対面。さっそく立ち木の根元に日本酒と塩をふりかけ、簡単にお清めする。それからTさんとお子さんが一緒に斧を入れて、最後は豊田さんがチェーンソーで一気に伐り込んだら、瞬く間にその木は倒れた。

豊田さんは、自分が守ってきた木を使う人と、こうやって顔を合わせる事ができて、とても嬉しいという。「目の前で喜ぶ顔を見ると、育てた甲斐があります」。

一方のTさん一家も、目の前で背の高い木が倒れこむ場面を見て、奥さまが「大きな音でしたね。楽しかった」と興奮した様子。新築する家は奥さまが友人と協同で設計しているそうで、この大黒柱は吹き抜けのあるリビングの階段まわりに据えて、家族みんなが触れられるものにしたという。丸柱にするか角柱にするかは考え中だ。香川では棟上げに50人近くを招いて盛大に行うというから、ご主人自ら斧を入れた大黒柱は、見所の一つとなるだろう。



Tさん一家と豊田さん。伐採した檜の根元は記念にお持ち帰り。



長身の豊田さんは60歳。50町歩の山を一人を守る。

「前回のイベントで、菅組がなぜ地元四国の木材を使っているかを知りました。遠くの木を伐って運ぶと、それだけ自動車や船の利用時間が増えて、二酸化炭素の排出量が多くなる。近くの山の木ならそれを減らせて、結果的に山が元気になるという話で、環境に対して自分ができることは何かと常に考えるようになりました。子どもたちにも、そういう意識を持たせてやりたい」とは奥さまの弁。そうした思いから今回も参加したという。家づくりと山と人の暮らしは、別個に存在するのではなく緩やかに結びついている。それを菅組は、地域の木を生かした家を建てることで伝えていきたいと考えている。まもなく創立百年を迎える同社にとって、それは次の百年に向けての一つの目標である。